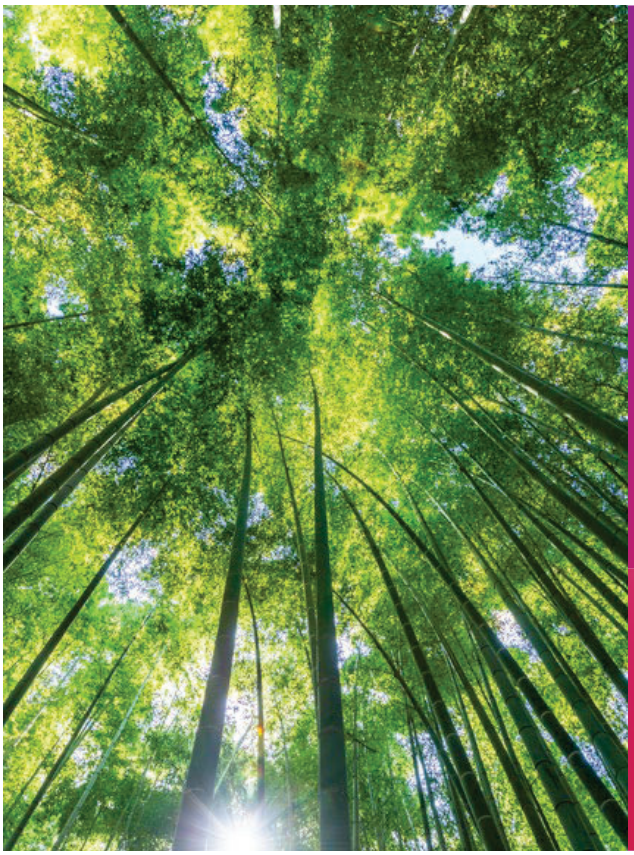


一社)日本臨床発達心理士会第21回全国大会
全国大会運営委員会企画 オンデマンド②

臨床発達心理士がなすべき事について考える

初期の全国大会の議論等から

専務理事　西山剛司　（京都文教大学）

臨床発達心理士はなぜ出来たのか

１９９０年代半ばに発達心理学会内であった危機意識

- 危機意識Ａ　大学における心理学の教育・研究の危機。発達心理学を深める場が痩せ細っていく
- 危機意識Ｂ　現場で発達的観点を持って働いていた心理関係者が「専門家」と見なされず、立場が弱くなり、発達的支援が脆弱化する。
- 「臨床心理士(1988発足)の二の舞を避けるべき

２０１７年３月２５日、第２８回発達心理学会シンポ「これからの臨床発達支援の独自性と専門性」における　麻生武先生の発表資料より

- 基礎研究をないがしろにしない資格を作るべき
- 支援を必要としている具体的な人々のニーズに応えるべき
- あくまでも心理学界における統一資格の枠内で実現されるべきもの

発達心理学会内での検討

1996年5月～1997年3月　日本発達心理学会理事会は第一次資格問題検討特別委員会（藤永保委員長）において資格の基本方針を検討

1998年8月～2000年3月　第二次の資格問題検討委員会（長崎勤委員長）において職能資格の内容を検討

2000年4月～2002年3月　第三次資格問題検討委員会（藤永保委員長）において運営システムと「臨床実習ガイドライン」を検討

士会サイト「沿革」参照
https://jacdp.jp/about/history/

臨床発達心理士の専門性

- 三つの発達的観点
- ①　今ここにおける発達の理解　(生物・社会・心理の三つの視点)
- ②　生成としての発達理解　(進化・歴史・個体史の三つの時間軸)
- ③　発達の多様性・具体性・個別性の理解　(インクルージョンの理解)
- →　「発達を理解する」「発達を支援する」という、この２つだけでは「専門性」を主張するには弱さがあります。…　理論的「専門性」だからです。(それらが)発揮されるにはまず臨床の現場が必要です。現場はとても一人の専門家で対処できるほど軽くないことも多い。
- (上記)三つの理解を目指す、現実や他の諸学問に開かれた学問。
- 他の専門性に開かれた活動。多様な現実に開かれ、自らを拡張し深化させていく専門性

麻生先生の提案では

理論的な専門性

現場における実践的な専門性

現場における実践的な専門性

1

三つの理解を目指す、現実や他の諸学問に開かれた学問

2

他の専門性に開かれた活動。多様な現実に開かれ、自らを拡張し深化させていく専門性

そもそも臨床発達心理士はどんな資格として構想されたか

- ２００１年３月２８日、第１２回発達心理学会大会「説明会」での資料から
- わたしたちの生活において、生涯発達の経過の中で起こる様々な問題がクローズアップされている。
- 子育て支援、児童虐待、不登校など家庭、保育、教育、福祉といった社会・文化的な状況と密接に関連して生起する諸問題を多く含む
- 近年の問題は、これらの個体能力の側からのアプローチに加え、健常・障害の境界領域の問題、個体能力と環境要因が不分離に関連しているような問題、また、社会・文化が複雑化し、それ自体が様々な問題を持ち、個体能力の発達に影響をもたらすといった事態にも対応できる、新たな発想によるアプローチが求められている。
- 従来の、もはや根拠も有効性もない不毛な２項対立を止揚し、生きる人間の理解のための発達心理学を再構築する必要があるであろう。そのような学問の創出の基に、人間の機構（個体内的側面、社会・文化的側面）を根元的に考えられる力を持つことと、生活の中で生き、様々な困難にある人々を「具体的に」支援する力の両面の力を持つ専門家を育て、社会に送り出してゆくためのバックアップを担うことが学会の役割といえよう。

発達心理学会全国大会での説明会では

人間の機構（個体内的側面、社会・文化的側面）を根元的に考えられる力

生活の中で生き、様々な困難にある人々を「具体的に」支援する力

その両面の力

学会連合「臨床発達心理士」認定運営機構（仮称）開設準備委員会設立趣意書

- ２００１年３月２１日　日本発達心理学会 理事長　柏木恵子
- 現在、わたしたちの生活において、生涯発達の経過の中で起こる様々な問題がクローズアップされています。それらは、知的障害や学習障害など、従来から発達臨床、発達障害の分野が問題にしてきた、その要因を明確に個体能力に帰結できる問題だけではなく、現代日本の社会・文化的環境の大変動を背景にした、「気になる子」のような健常と障害との境界領域の問題、また、育児不安、児童虐待、不登校など、現代の家庭、保育、教育、福祉の生活文脈と密接に関連して生起する諸問題を多く含むようになってきています。しかも、子どもたちだけでなく、青年期、成人期、老年期の社会生活の不安定さが、やはり、今日独特の心身の不全をもたらすという、まさにライフ・スパン的な諸問題が山積していることは、周知の事実でありましょう。今日まで、発達臨床、発達障害に関しての発達心理学の貢献および成果は著しいものがありましたが、近年の問題は、これらの個体能力の側からのアプローチに加え、健常と障害との境界領域の問題、個体能力と文脈要因が不可分に関連しているような問題、また、社会・文化が複雑化し、それ自体が様々な問題を持ち、個体能力の発達に影響をもたらすといった事態にも対応できる、新たな発想によるアプローチが求められています。

設立趣意書では

- 健常と障害との境界領域の問題
- 個体能力と文脈要因が不可分に関連しているような問題
- 社会・文化が複雑化し、それ自体が様々な問題を持ち、個体能力の発達に影響をもたらすといった事態
- それらに対応できる、新たな発想

２０２４年度版、資格認定申請ガイド

- 現在、私たちの生活において、生涯発達の中で起こる様々な問題がクローズアップされてきています。それらは、知的障害、学習障害等、従来から発達臨床、発達障害の分野が問題にしてきた、その要因を明確に個体能力に帰結できる問題だけではなく、「気になる子」のような定型発達と障害との境界領域の問題、また、子育て支援、幼児・児童虐待、不登校等、家庭、保育、教育、福祉といった社会・文化的な状況と密接に関連して生起する諸問題を多く含むようになってきています。今日までの発達臨床、発達障害に関しての発達心理学の貢献および成果は著しいものがありました。しかし、近年これらの個体能力の側からのアプローチに加え、定型発達・障害の境界領域の問題、個体能力と環境要因が不分離に関連しているような問題、また、社会・文化が複雑化し、捉え方も多様化し、それ自体が様々な問題を内包し、個体能力の発達に影響をもたらすといった認識にも対応できる、新たな発想によるアプローチが求められています。
- (このあと、「発達の三つの理解」の説明が続く)
  https://drive.google.com/file/d/1Bi9U4APZo1HbWSG1E2AMi-koUcE2QTpz/view　参照

２０２４年度版　資格認定申請ガイドの記述

「２００１年の設立趣意書」とほぼ同じ事が述べられており

２０１７年の麻生先生論文の要約がそれに続いている

「臨床発達心理士」の一貫した特徴

三つの発達的理解

現実や他の専門性に開かれた活動

初期の全国大会の様子から

第一回大会

２００５年８月２０日・２１日

青山学院大学

会員数１２００名超

実践研究プロジェクトのシンポジウム３企画

実践研究発表　５５題

テーマ別交流会　１３会場

実践研究プロジェクト企画シンポジウム

- 「この間、「特別支援教育」「発達障害者支援法」「子ども・子育て応援プラン」などが策定され、それぞれの支援の質が問われる時代になってきました。日本臨床発達心理士会では、これらの動きに対応して「育児支援」「特別支援教育」「思春期の社会適応」の実践研究プロジェクトを立ち上げ、全国調査の実施や行政との連携…全国研修会を開催し、おのおのの領域における会員の専門性を高める事業を展開してきました (大会挨拶より)」
- 「少子・高齢化社会における育児支援の課題」
- 「思春期の社会適応支援 ―揺れる自我同一性への支援― 」
- 「軽度発達障害児への発達支援の課題」　(公開企画)

少子・高齢化社会における育児支援の課題

- 企画　藤崎眞知代(明治学院大学)　大日向雅美(恵泉女学園大学)
- 司会　藤崎眞知代(明治学院大学)
- 真の意味で「子どもを産み育てることに喜びを感じる社会」への転換のために(企画趣旨より)
- 話題提供
- 　問題をかかえる親子への育児支援の可能性とその課題　―包括的コミュニティー・ケアシステムの構築―　(三隅輝見子・横浜市北部地域療育センター)
- 　地域の育児力を高める支援とその課題　―保育所における子育て支援事業を支援した経験から―　(足立智昭・宮城学院女子大学)
- 　思春期までを視野に入れた子育て支援とその課題　―両極に揺れる子どもの「傍らにいる」大人のあり方の検討を通して―　(岡健・大妻女子大学)
- 指定討論　大日向雅美(恵泉女学園大学)

思春期の社会適応支援 ―揺れる自我同一性―の支援―

- 企画　佐竹真次(山形県立保健医療大学)　金谷京子(聖学院大学)
- 司会　金谷京子(聖学院大学)
- 軽度発達障害の生徒たちにおいては、ただ通常学級での教科学習をマスターするだけで、職業的スキルや職業人として生きている心構え・意欲が、…社会参加スキルや他者を大切にする心構えが育つのであろうか。(企画趣旨より)
- 話題提供
- 　中学校段階における適応指導の課題　菊池雅彦(東村山市立東村山第三中学校)
- 　高等学校段階における適応指導の課題　野口昌宏(作新学院高等学校)
- 　軽度発達障害者の思春期の危機対応　堀江まゆみ(白梅学園短期大学)
- 　自我同一性の問題を先天性と後天性から探る　―被虐待経験と思春期、性同一性障害と思春期―　梅宮れいか(福島学院大学)
- 指定討論　村田義幸(長崎大学)

軽度発達障害児への発達支援の課題(公開企画)

- 企画趣旨より　「今後の特別支援教育のあり方について」「発達障害者支援法」「東京都の高等養護学校設置と小中高校に在籍する軽度発達障害等の児童生徒への支援として臨床発達心理士を派遣」という状況を踏まえ、「どこ」に焦点を当て、「どう」支援するのか。
- 司会　長崎勤(筑波大学人間総合科学研究科)
- 話題提供
- 　小児科学の課題：乳幼児から思春期・成人期への発達支援と医療　宮本信也(筑波大学人間総合科学研究科)
- 　高機能自閉症児の子どもを育てて：母として臨床発達心理士として　高橋和子(アルクラブ・大阪アスベの会)
- 　東京都における軽度発達障害児への支援の展望：新たな特別支援教育体制の構築と臨床発達心理士への期待　半澤喜博(東京都教育庁指導部)
- 指定討論　東條吉邦(茨城大学教育学部)

５５題の実践研究発表

- 筆頭発表者の所属
- 大学・研究所　１５題
- 諸学校園所　２５題
- 支援センター・福祉事業所等　１１題
- 行政関係　４題

第二回大会

２００６年８月５日・６日

大阪国際会議場グランキューブ大阪

会員数１５００名超

基調講演

実践研究プロジェクトのシンポジウム３企画

実践研究発表　３９題

テーマ別交流会　５会場　各３レポート

実践研究プロジェクト企画シンポジウム

- 「一方で、子どもの発達を著しく阻害する虐待は、「児童虐待防止法」の制定後も後を絶ちません。…また児童から大学生にいたるまでの「引きこもり」、若年者の「ニート」などの問題も深刻です。……　同時に、現代の発達に関わる諸問題に対処するためには、専門を異にする会員同士または関係諸機関のネットワークづくりも大切です。」
- 「幹事会では２年に１度くらいの割合で全国大会を開催していく方向を検討していましたが、…各支部の会員からの要望を踏まえ、昨年に引き続き…開催することにしました。」　(大会挨拶より)」
- 「子育て支援現場において臨床発達心理士は何が出来るのか」
- 「特別支援教育の現場で何が起きているのか? 」
- 「豊かな青年期を過ごすために」
- 公開シンポジウム　「教育と福祉の地域ネットワークの構築に向けて」

子育て支援現場において臨床発達心理士は何が出来るのか
ーアンケート調査から見えてくることー

- 企画　藤崎眞知代(明治学院大学)　大日向雅美(恵泉女学園大学)
- 企画趣旨より　会員の実態把握。プロジェクトメンバーは１４名で、会員１２０７名にアンケート。３３０名が回答(回答率27.3%)。現場で行っていること、行える可能性のあること、しないほうがよいことを抽出。ネットワーク作りから職場の拡大・開拓に繋げる。
- 司会　大日向雅美(恵泉女学園大学)
- 話題提供
- 　臨床発達心理士と育児支援の関わりに関する調査の概要　藤崎眞知代(明治学院大学)
- 　発達的視点に基づく子育て支援活動の計画と評価　(足立智昭・宮城学院女子大学)
- 　臨床発達心理士の役割とその可能性　寺見陽子(中部学院大学)
- 指定討論　山縣文治(大阪市立大学)

特別支援教育の現場で何が起きているのか?
ー通常クラスでの発達支援の方法と課題ー

- 企画・司会　長崎勤(筑波大学)
- 企画趣旨から　特別支援教育が急速に展開されつつあるが、…臨床発達心理士が特別支援教育に果たす役割はますます大きくなることが予想される。……学内の特別支援教育コーディネーターや校内委員会の機能化と、外部専門家や巡回相談員による通常クラスの子どもに対すアセスメントやコンサルテーションの妥当性が検討される必要があろう。
- 話題提供
- 　臨床発達心理士会・東京支部が依頼されたＡ区小・中学校への巡回相談の実践を通して　竹谷志保子(うめだ・あけぼの学園)
- 　通常学級における軽度発達障害児への支援　ー行動上の問題への対応ー　小林真(富山大学)
- 　幼児期・学童期の特別支援教育巡回相談の現状と課題　ーアセスメントと支援を巡ってー　金谷京子(聖学院大学)
- 指定討論　藤田継道(兵庫教育大学)　長崎勤(筑波大学)

豊かな青年期を過ごすために

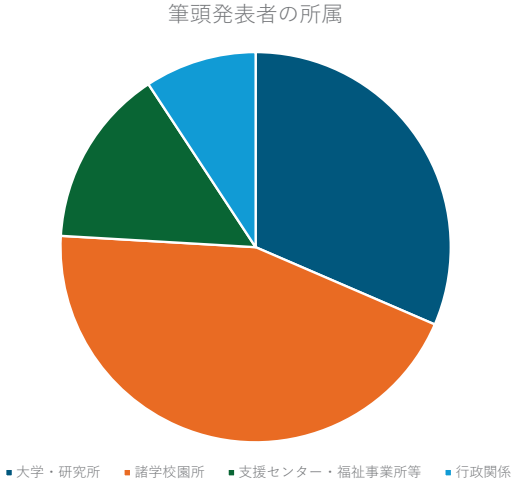
- 企画・士会　梅宮れいか(福島学院大学福祉学部)
- 企画趣旨より　ヒトが成長する過程の単純な模式図は、①流れる時間=縦糸と②紡がれる横糸=エピソードで構成され…るが、時間軸に対してエピソードが織り込まれてゆく順序とタイミングが的確であれば、人格は健康的に発達してゆけるのであろうか。豊かさとは、このように機械的なものなのであろうか。
- 話題提供
- 難治療疾患児が夢見る青年期 (青年期以前の影響)　片山美香(岡山大学教育学部)
- 顎顔面形成が青年期に及ぼす影響 (身体とこころの関係)　長坂浩(宮城県立こども病院歯科口腔外科)
- "真実の自己"がもたらす青年期の苦悩 (個人と社会との相互関係)　山本蘭(gid.jp)
- 指定討論ではなく、ラウンドテーブル方式

公開シンポジウム
教育と福祉の地域ネットワークの構築に向けて

- 司会　井上雅彦(兵庫教育大学大学院　学校教育研究科)
- 企画趣旨より　書類の上だけの連携ではなく、各機関がそれぞれの特徴を生かした役割を持つことでより多くの効果をもたらすためにはどのような働きかけや仕組み作りが必要なのか、またその中で専門家としてどのような技能が必要とされるのか
- 話題提供
- 発達障害者支援にかかわる地域ネットワーク　犬飼揚子(ひょうご発達障害者支援センター)
- 特別支援教育にかかわる地域ネットワーク　中尾茂樹(神戸市教育委員会こうべ学びの支援センター指導主事)
- 子ども虐待にかかわる地域ネットワーク　岡本正子(大阪教育大学)
- 指定討論　柘植雅義(兵庫教育大学大学院　学校教育研究科)

実践研究発表とテーマ別交流会

- 実践研究発表で３９題、テーマ別交流会に１５題　合計５４題のレポートが提出
- 筆頭発表者の所属
- 　大学・研究所　17
- 　学校園所　24
- 　発達支援事業所・センター　7
- 　行政機関　5



第三回大会

２００７年７月２８日・２９日

日本女子大学目白キャンパス

会員数１８００名超

基調講演　二題

実践研究プロジェクトのシンポジウム３企画

実践研究発表　４２題

テーマ別交流会　７会場

基調講演・実践研究プロジェクト企画シンポジウム等

- 「臨床的な対応を必要とする事件がまたもや世間を賑わせておりますが、そのような突出した事例だけでなく臨床的な援助を必要とする人たちが、私たちの周りには多く存在すると思われます。…　そのための技術を絶えず磨き続ける努力が必要なのかも知れません。」(大会挨拶より)」
- 基調講演1「特別支援教育推進事業における専門家の活用」
- 基調講演2「臨床発達心理士の将来展望」
- 「保育支援の現状と今後のあり方」
- 「発達的観点を持った特別支援教育コーディネーターはこう働く」
- 「軽度発達障害者の高等教育における支援と展望」
- 公開シンポジウム　「生きにくさをかかえる人のための支援を考える」

基調講演1・2

- 基調講演1　「特別支援教育推進事業における専門家の活用」
- 講演　石塚謙二(文部科学省初等中等教育局特別支援教育課)
- 1.法令・制度改正など　2.学習指導要領の改訂方向　3.予算・事業など

- 基調講演2　「臨床発達心理士の将来展望　一保育・教育の場への貢献一」
- 講演　無藤隆(学会連合資格「臨床発達心理士」認定運営機構理事長/白梅学園大学学長)
- 1.発達と臨床実践の間　2.発達のつまずきと援助　3.専門家として支援する　4.現場の実践者と専門家の関係　5.現場の実践者における発達臨床的知見　6.基礎研究とのつながり　7.専門家の養成、専門家としての向上

保育支援の現状と今後のあり方

- 企画　プロジェクト<保育支援>　山崎晃(明治学院大学)　秦野悦子(白百合女子大学)
- 企画趣旨より　現場の声・ニーズをどのようにくみ取り、対応していくかは、臨床発達心理士の支援の質や今後の保育支援のあり方に重要な影響を及ぼすものであろう
- 司会　山崎晃(明治学院大学)
- 話題提供
- 　仙台市における巡回相談システムを通してみる臨床発達心理士の専門性　本郷一夫(東北大学)
- 　保育支援の実態とニーズ　ー保育園・幼稚園における情報の入手と活用方法　三宅幹子(福山大学)
- 　保育支援の実態とニーズ　ー関係機関との連携のあり方　倉盛美穂子(鈴峯女子短期大学)
- 指定討論　柴田正行(大妻女子大学)

発達的観点を持った特別支援教育コーディネーターはこう働く

- 企画　プロジェクト<特別支援教育>　長崎勤(筑波大学)
- 企画趣旨より　子どもを発達的な観点から支援しつつ、職場の中で多くの人々がその子どもに支援的に関わるように配慮するには、自身の心身の健康も含めてどのような工夫が必要か
- 司会　長崎勤(筑波大学)
- 話題提供
- 　支援を階層化し、職員の意識に根付くための試み　ー小学校での特別支援教育コーディネーターとして　堀彰人(八千代市教育委員会・前八千代市立米本南小学校)
- 　頼られる特別支援学校へ　ーセンター的機能と特別支援教育コーディネーターの役割　鈴木彰典(千葉県立富里特別支援学校)
- 　私はこうして乗り越えた　ー自分を支えてくれた士会の理念とフットワーク・チームワーク・ネットワーク　　三原富士子(埼玉県立騎西養護学校)
- 指定討論　渡辺実(花園大学)　　大石幸司(立教大学)

軽度発達障害者の高等教育における支援と展望

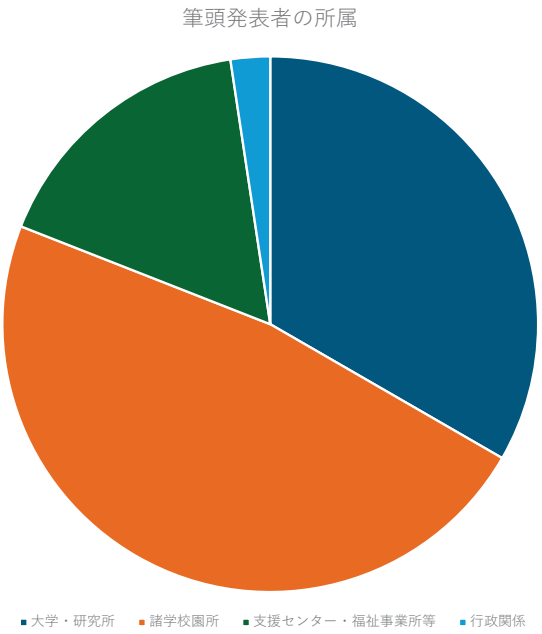
- 企画　プロジェクト<思春期の社会適応支援>　佐竹真次(山形県立保健医療大学)　金谷京子(聖学院大学)
- 企画趣旨より　今後高等教育においても特別支援教育が急速に進展していくことは明らかであり、各高等教育機関はそのシステムについて早急に検討実施していくことが求められる
- 司会　佐竹真次(山形県立保健医療大学)
- 話題提供
- 　大学における軽度発達障害者の支援ニーズについて　一当事者の視点から　高橋和子(アルクラブ・大阪アスペの会)
- 　軽度発達障害がある大学生に対する支援の実際　一精神科医の立場から　岡田俊(京都大学)
- 　大学における発達障害者への支援　一学生相談室からの発信　竹淵香織(聖学院大学)
- 指定討論　村田義幸(長崎大学)　今林俊一(鹿児島大学)

公開シンポジウム
生きにくさをかかえる人のための支援を考える

- 企画　士会・大会準備委員会
- 企画趣旨から　今の社会のなかで、喪失体験、傷害や疾病のある人等、社会の中で自分の居場所を見つけられないなど、生きにくさを抱える人の理解や支援が求められている。臨床発達心理士としてどう関わりながら支援していけるのか。
- 発達障害ネットワーク　埼玉県教委　文科省の後援
- 司会　大石幸二(立教大学)
- シンポジスト
- 　医療から見た子どもの変化　一認知特性からみた社会での生きにくさ　宮尾益知(国立成育医療センター)
- 　メディア環境が子どもを蝕む　清川輝基(NPO子どもとメディア代表理事)
- 　社会的自立に向けた支援プログラム　三宅篤子(ウィルミントンTEACCHセンターインターン)
- 指定討論　本郷一夫(東北大学)　高橋和子(アルクラブ・大阪アスペの会)

４２題の実践研究発表

- 実践研究発表筆頭者の所属
- 大学・研究機関　１４題
- 学校園所　２０題
- センター事業所　７題
- 行政機関　１題



第四回大会

２００８年８月２日・３日

宮城県　仙台国際センター

会員数２０００名超

基調講演　１　　準備委員会企画　２

実践研究プロジェクトのシンポジウム２企画

実践研究発表２７題

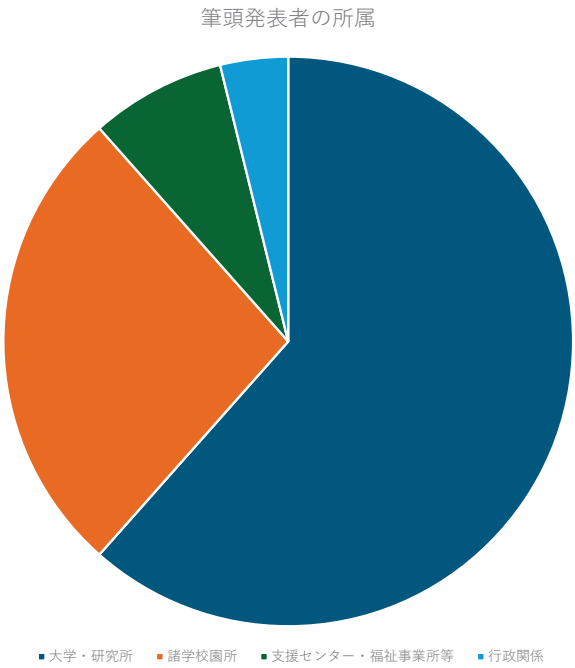
テーマ別交流会　７会場

基調講演・実践研究プロジェクト企画シンポジウム等

- (大会挨拶の中で、社会問題についての具体的な言及はなくなった)
- 「発達障害児の生涯発達支援のキーワード」
- 「発達障害を持つ青年の就労支援・キャリアカウンセリング」
- 準備委員会企画１「家族を中心にした小児医療に学ぶ」
- 準備委員会企画２「虐待への新しい視座を目指して」
- 公開シンポジウム　「高機能自閉症クラスへの支援など、発達に困難のある子どもへの支援」

２７題の実践研究発表

- 実践研究発表筆頭者の所属
- 大学・研究機関　１６題
- 学校園所　７題
- センター事業所　２題
- 行政機関　１題



第五回大会

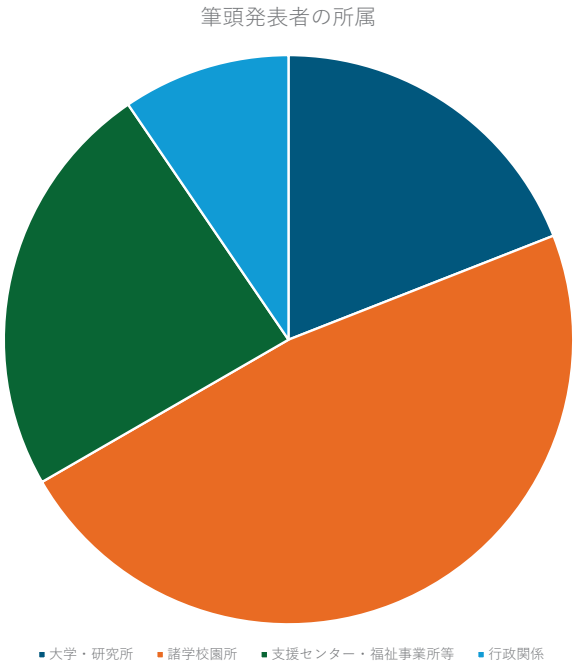
２００９年８月８日・９日
愛知学院大学日進キャンパス
会員数２３００名超
基調講演　１　　準備委員会公開企画　１
実践研究プロジェクトが再編され　１
実践研究発表２１題
テーマ別交流会　７会場
倫理委員会・編集委員会企画登場

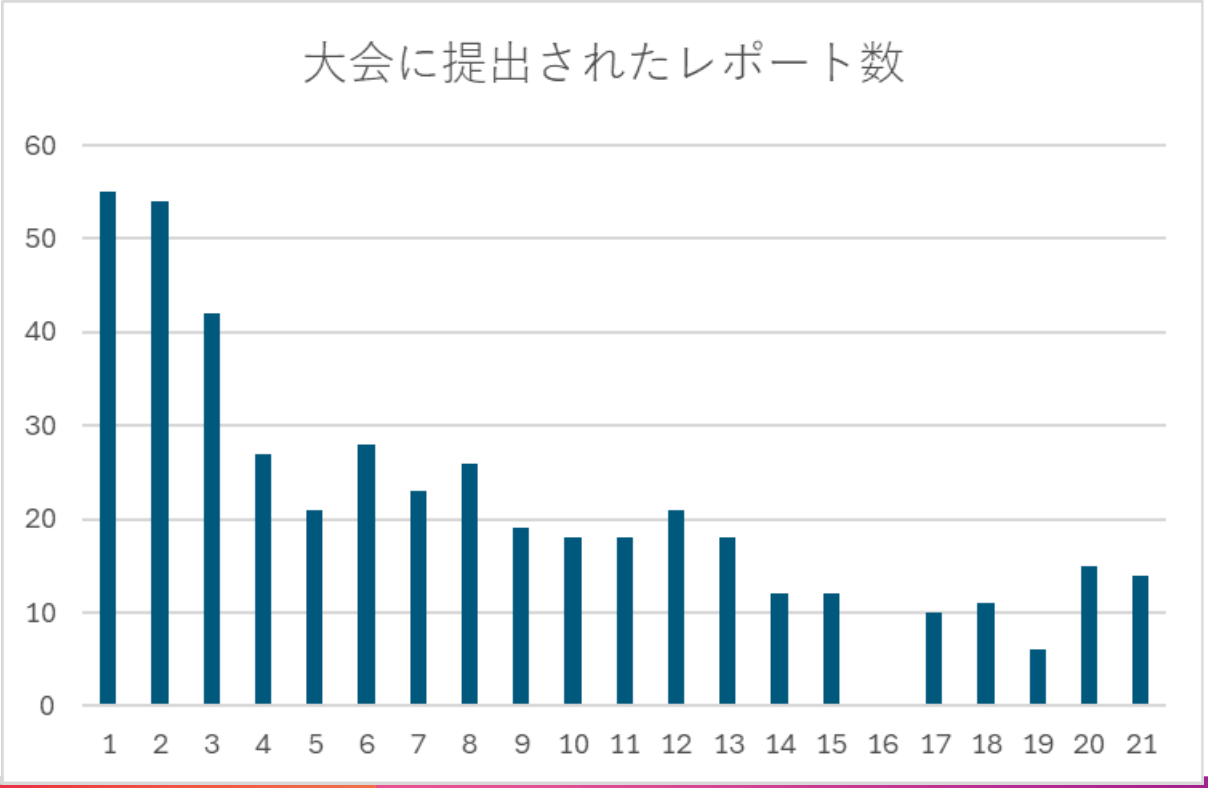
基調講演・実践研究プロジェクト企画シンポジウム等

- (引き続き大会挨拶の中で、社会問題についての具体的な言及はない。これ以降もされない)
- 「思春期・成人期の発達障害者への就労支援」
- 倫理委員会企画「臨床発達心理士の倫理の基本」
- 災害・社会的トラブルＷＧ企画「災害・社会的トラブルに対する臨床発達心理士の役割」
- 実践誌編集委員会企画「こうすれば書ける実践研究ー実践をどう共有するか」
- 公開シンポジウム　「発達障害の現場から」

21題の実践研究発表

- 実践研究発表筆頭者の所属
- 大学・研究機関　　４題
- 学校園所　　１０題
- センター事業所　　５題
- 行政機関　　２題





小括

- 設立当初の理念は、今に至るまで引き継がれている(はず)。(資格認定申請ガイドの記述から)
- 初期大会(１回から３回まで)は、社会問題に直接取り組む方向性が、大会挨拶で述べられ、「研究プロジェクトの活動と発表」「さかんな実践研究発表」「テーマ別交流会」が中心の構成で、会員が主体的に「現実」に取り組み、それを発表・交流するということが体現されていた。
- 第５回大会以降(第６回大会を別にして)次第にその傾向が薄くなり、「実践セミナー」が始まり「テーマ別交流会」がなくなり、実践研究発表の数が減っていった。つまり、会員が「発表・交流」するというより「セミナーを受講する」というデザインになっていった。
- 法人化以降、全国大会運営委員会を中心に、執行部も参加して、その改革について検討しつつある。昨年は「情報交換会」「職能向上セミナー」として実技中心のセミナーを設置し、今大会では「実践セミナーＡＢ」をなくし「実践研究発表」を「シンポ・口頭発表・ポスター発表」にするなど、「会員の発表と交流の場」とする改訂を行っている。

今私たちがなすべき事は

現場における実践的な専門性

1

三つの理解を目指す、現実や他の諸学問に開かれた学問

2

他の専門性に開かれた活動。多様な現実に開かれ、自らを拡張し深化させていく専門性

三つの発達的視点の確認

「他の専門性に開かれた活動。多様な現実に開かれ、自らを拡張し深化させていく」ことと密接に連動した「三つの発達的観点」を確実に身につけること

① 今ここにおける発達の理解 （生物・社会・心理の三つの視点）

② 生成としての発達理解 （進化・歴史・個体史の三つの時間軸）

③ 発達の多様性・具体性・個別性の理解 （インクルージョンの理解）

１．今ここにおける発達の理解(生物・社会・心理の三つの視点)

対象者がどのような状況や生活文脈の中でどのように生きているのか、そのことをまず「今ここ」の視点からとらえる

対象者の身体や発育の状況を、生物学的視点で正確に把握すること。心身機能、身体構造などの把握

対象者が暮らしている社会関係、人間関係、社会的な立場など

対象者の心理状態、覚醒状態、情動的記憶、知的機能など

これだけでも「この人は〇〇という診断があるから△△である」とはとても言えないことが分る。

スピノザ的に言うと

- (最近、スピノザ(17世紀の哲学者)に興味を持っていまして。きっかけは「2024年度本屋大賞にノミネートされた夏川草介の「スピノザの診察室」なんですが、例えば、ヴィゴツキー(情動の理論)やダマシオ(感じる脳)も、スピノザを参照しているのですね)

- 人間は、単に男であったり女であったり、あるいは、大人であったり子どもであったり、障害者であったり外国人であったりというような、有る「形」で生きているのではなく、常に具体的な環境と歴史と欲望が交錯する中で生きている。
- カテゴリー分けされることや、細かく要素に分けて分析されることで得られる情報もあるが、最終的には、その人個人を、しかも様々な環境や個人史やそのときの情動等の中で全体的に捉えないと、的確な支援は出来ないのですね。
- 臨床発達心理士は、そういう「総合する力」が必要なのだと思います。

２．生成としての発達理解(進化・歴史・個体史の三つの時間軸)

発達心理学は、「進化」・「歴史」・「個体史」という三つの時間軸で、人間の諸行動を理解しようとしている

↓

- 対象者を、生物進化の中に位置づけて捉える
- 対象者を、歴史の中に位置づけて捉える
- 対象者の個人史の一場面として捉える

↓

対象者の「今」を、どのように形成され今後どのように変化していくのか、という「動き」の中に位置づけて捉える

進化史的に見ると　　骨盤は語る

チンパンジーとヒトは、同一の祖先から600～700万年前に分岐したと推定されている

二足歩行

重い脳を支えられる

手が自由

骨盤変形
難産に

脳が発達

大きな頭では産めない
早めに産む

未熟で出産

目が横長に

自由な発達方向の可能性

沢山の世話が必要

意図を伝え合い協力し合う

ヒトの脳の少なくない部分のネットワークは生まれてから形成される

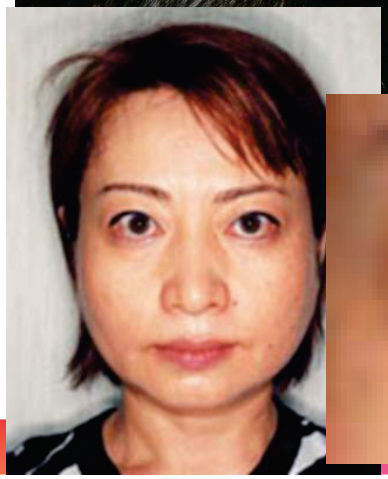
一人一人の脳は、それぞれ非常に異なっている。

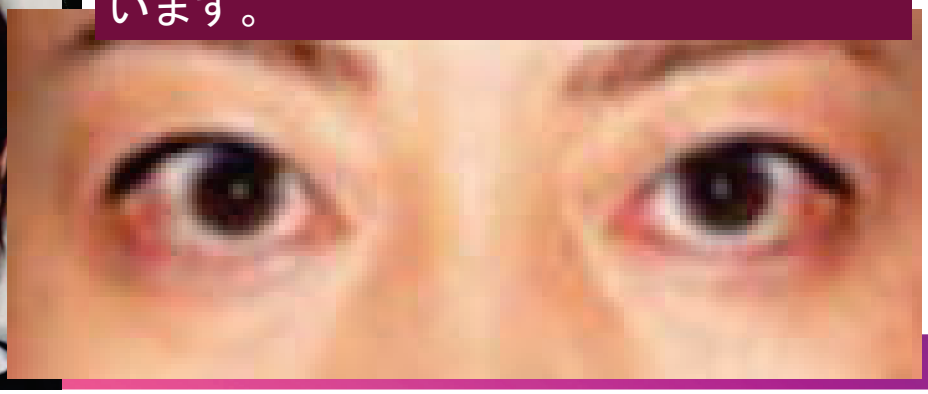
子育てに様々な年長者が関わる。
様々な環境の中で暮らすようになる。
脳細胞ネットワークに多様な異なった刺激が与えられ、その結合に影響する

例えば、「目」の機能に注目すると

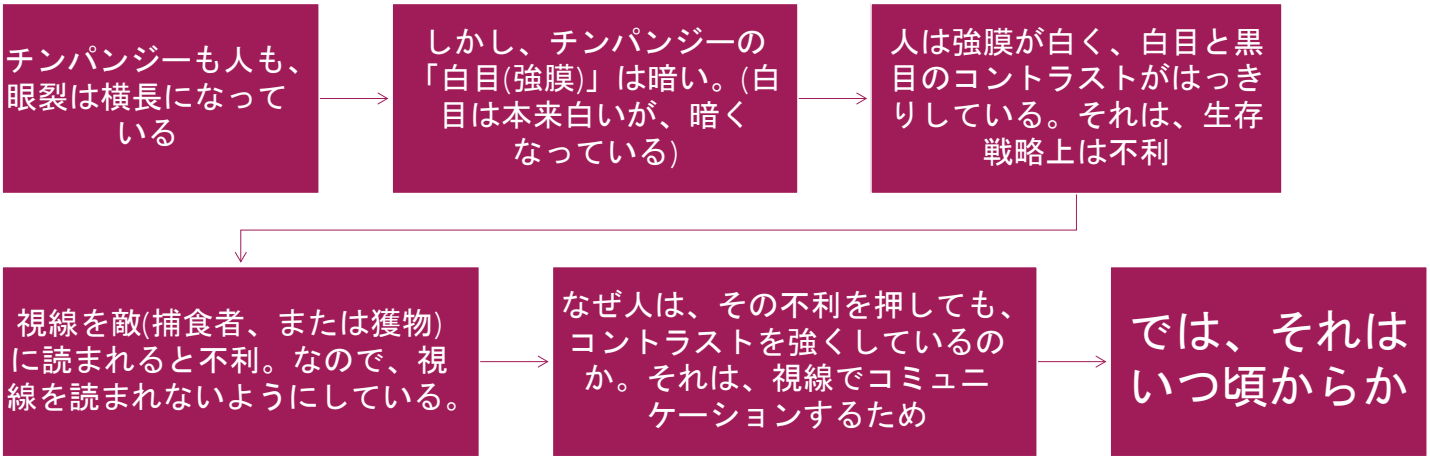
実は、犬も猫も(見えないけど)白目は白いのです

類人猿は、わざわざ「白目」を暗くしています。





人と他の動物の目の違い



白目が白くなったのはいつ頃?

- 目の色の化石はない。
- では、人が大きな集団をつくり協力し合って生活するようになったことの痕跡はあるか。
- 旧石器時代の内、「後期旧石器時代」と呼ばれる頃に、やっとその痕跡が見られる。５万年前から１万年前頃まで。
- その頃から、集団で狩りをする。「目」「視線」で合図を送る。つまり、視線が読まれる事の不利より、視線を使う有利さが勝るようになり、白目が白いことに意味があるようになった。この頃には白目は黒くならなくなっていただろう。長く見積もっても５万年前、おそらくは２万年くらい前までには。

視線利用は、最近のこと

- 脊椎動物　5億年前
- 恐竜の時代　2億5千万年前
- 哺乳類の誕生　2億3千万年前
- 霊長類への分化の始まり　6500万年前
- 真猿類の多様化　　3500万年前
- 類人猿の誕生　2500万年前
- チンパンジーとの分化　700万年前
- ヒトの誕生　500万年前
- ホモ族の誕生　180万年前
- ホモサピエンス・サピエンス(現生人類)の誕生　20万年前
- 白目が白いままで残る　2万年前?

これは、ごく最近の出来事。「視線の利用」に個体によるばらつきがあっても当然ではないか

視線利用がうまく出来ないと

同じ物を見る　共同注意 → 私とあなたが同じ物を見ていることが分る　三項関係 → →　これらは、言葉を獲得する原動力

↓

視線の利用が苦手な人は、言葉の獲得、コミュニケーションの力を「直感的に」「楽に」獲得することに不利

← 人は人から、人を通して学ぶことが多いので、様々な事を学ぶことにも不利

チンパンジーの空間認知力

- 京都大学霊長類研究所(現「ヒト行動進化研究センター」)のチンパンジーは、人間よりも遙かに高い「空間認知の記憶力を持つ」

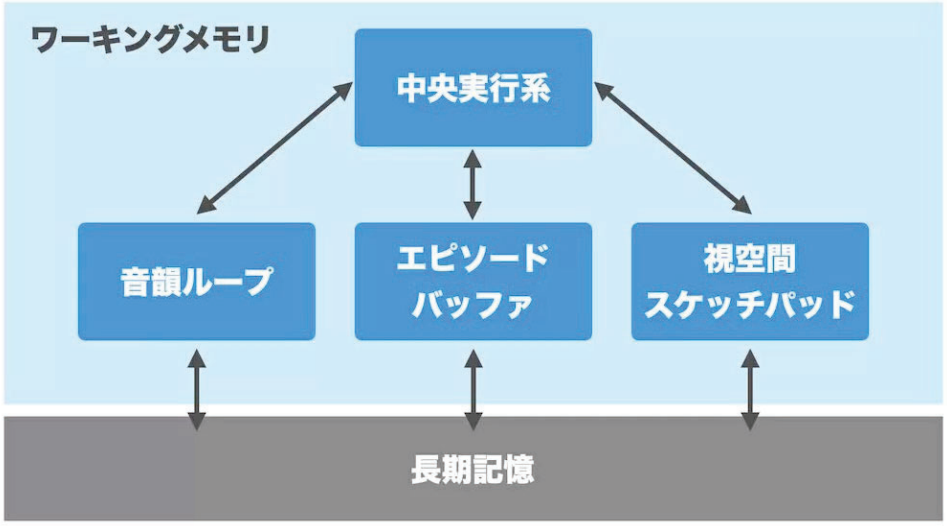
- https://www.youtube.com/watch?v=UneaXXgExJU

認知的トレードオフ

音声を使用することで「音韻ループ」が成立する。言葉の使用が苦手な場合、「音韻ループ」より「視空間スケッチパッド」が優勢となる。

チンパンジーは主として視空間スケッチパッドを使用する。

脳の資源は限られているので、人は、視空間スケッチパッドに使用する脳の資源を犠牲にしても、社会性と言語の力を伸ばすことにしたようだ。



https://asu-yoku-laboratory.com/working-memory

西アフリカのチンパンジーの道具使用

- 西アフリカ・ボッソウのチンパンジーは、台石にアブラヤシの種を乗せ、ハンマー石で叩いて中の核を取り出して食べる。
- 子どもは、親がそれをしているところを見て、核が出てくることを知り、真似て自分の出来るようになる。(エミュレーションの模倣)
- ４３００年前にも、同じような「道具使用」をしていたことがわかっている。

- https://www.youtube.com/watch?v=ZmBR68pqqWA&t=258s

人とチンパンジーは何が違うのか

人とチンパンジーは遺伝子が98.9%一致している。

人同士でも、個体間で0.1%遺伝子は相違している。

人とチンパンジーは、遺伝的には極めて近い。

人に出来てチンパンジーには出来ないことは、他者の意図を含めてまねる(イミテーション)こと

他者がやっていることの結果を出すことをまねる(エミュレーション)はできる。(ニホンザルでも。幸島のイモ洗い)

ラチェット効果(マイケル・トマセロ)

なぜ4300年前と同じ事をしているのか

知識や技術を「伝えて」いるのではない。他者の行為を見て、その「結果」をもたらす方法を、毎回「見いだして」いるのである。だから、積み上がっていかない。

「新しいこと」を発見・発明する力は、チンパンジーは持っている。持っていないのは、同じ事をまねていく、そのことを伝えていくという力である。

人は、同じ事をずっと行い、前に戻さない力(ラチェット)を持っている。

ラチェットだけでは戻らないが進まない

誰かが見つけた方法を皆がまね、維持していくうちに、また誰かが新しい方法を発見・発明し、その「新しい方法」を、また、皆がまね、維持していく。

その「新しい方法」を発見・発明するのは「同じ事をしたい、しなければならない」と感じる「人の多数派」ではない人。それは、視線の活用が苦手な人の中に多く見られる

人の文明は、「皆と同じ事をし、それをし続ける」多数派と、「人と同じ事をするのが苦手」な少数派の共同作業によって達成してきた

人の脳の発達は自由で多様

人の中に、視線の活用が苦手な人、つまり、社会コミュニケーションが苦手な人が一定する居るのは自然なこと

コミュニケーションに長けた多数派と、それが苦手な少数派の共同作業の結果、人間の文化が進展し、発達してきた

自閉のある人とそれ以外の人はともに人類にとって必要で、価値の上でも全く平等であること

歴史的に見ると(極めておおざっぱに)

- 16世紀はじめあたりから、「学校」で「同年齢の均質集団=学級」が現れ始める
- 16世紀終わりから17世紀にかけて、「近代的学校」が現れていく。子どもとして保護される期間の延長と「不道徳(性行為)」から引き離すこと(キリスト教的道徳)。子どもの誕生(ｱﾘｴｽ)
- 18世紀半ばから　「産業革命」と「エンクロージャー」大量生産とそれを支える等質な労働者の必要性　一方で児童労働の進展
- 児童の世紀(エレン・ケイ)　児童の権利についての注目
- 児童の権利の宣言、子どもの権利条約へ
- 　日本では
- 1960年代　高度経済成長　集団就職から高校進学率の上昇へ
- 1970年代半ばから　オイルショックから世界的経済危機(恐慌)
- それをうけて1980年代から　新自由主義と自己責任論・同調圧力
  (これ以降、失われた３０年)

発達の交流型モデル(オリジナル)　A.サメロフ

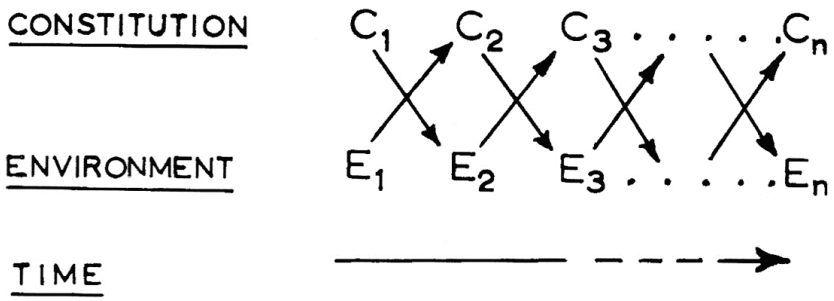
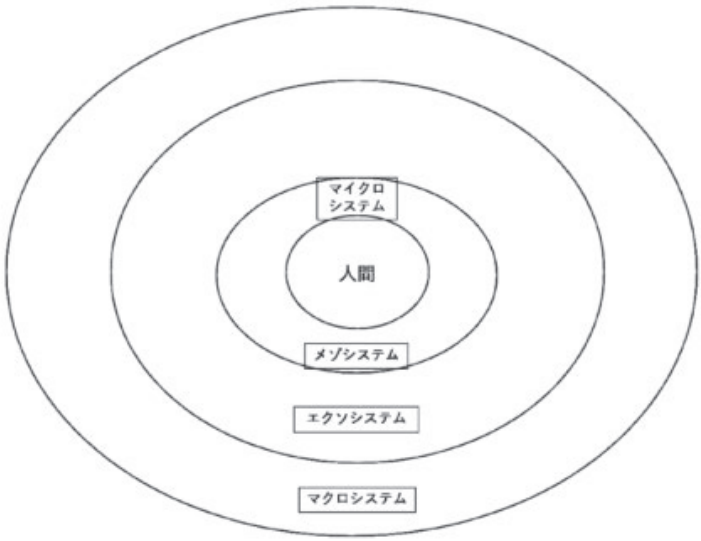


Figure 1.1. Original depiction of transactional model (Sameroff, 1975).

子どもの状態(C1)は環境(E1)の影響を受けてC2に変化していくが、同時に環境(E1)もC1の影響を受けてE2へと変化していく。C2はこんどはE2の影響を受けてC3に変化していく。

ブロンフェンブレンナーの生態学的システム論



定義５「マクロシステム」とは、下位文化や文化全体のレベルで存在している、あるいは存在しうるような下位システムの形態や内容における一貫性をいい、こうした一貫性の背景にある信念体系やイデオロギーに対応する者である」

→「存在しうる」という言葉を慎重に用いたのは、マクロシステムの概念を、現状の限界から脱して将来に対する可能な青写真にまで拡張させたかったからである。
　「人間発達の生態学(ブロンフェンブレンナー)」

進化・歴史の小括

- 人は他の生物に比べても多様で自由な発達を遂げている存在
- （自由とは、必然性を洞察することである）
- いま「常識・当然」と思われていることも大きなスケールで見ると一瞬のことであり、変化しつつある、ある一局面でのことである。
- 人の発達と相互作用する環境は、マイクロシステムだけではなくマクロシステムまでも含む
- マクロシステムは「普遍で不変」のように見えるが、これも相互作用している。
- よって、発達の支援者は、対象者だけではなく、また、周囲の環境だけでなく、大きな環境にまで目を向けて、不都合な部分は変えていく努力が求められる。
- それは、(たとえば「さやか星小学校の実践」のような)自分ができる範囲での改良であったり、国などの大きなシステムの改良に向けて声をあげることであったりする。

３．発達の多様性・具体性・個別性の理解(インクルージョンの理解)

「具体性の理解」・「意味の理解」・「全体的包括的な理解」・「関係論あるいはシステム論的視点」・「歴史的な文脈の重視」

インクルージョンの視点とは、一人一人の「具体」に現れる「個別性」・「多様性」、つまり、さまざまな「兆候」・「問題」・「障害」を、人間存在の一般的な在り方の現れとして理解しようとすることです。これは、まさに臨床発達心理士の目指すべき視点に他なりません。

言い換えると

目の前の対象者を、ある「枠組み」「望ましい姿」に当てはめて評価せず、その人の「今」をまず認め、その上で、その人なりの発達を支援する

「問題」をその人の特性・努力不足・障害・能力等の個のみに帰結させず、マクロシステムまで含めた生態学的システムの相互作用として認識して対応する

さまざまな「兆候」・「問題」・「障害」を、人間存在の一般的な在り方の現れとして理解する

つまり、すべての人間の尊厳、自由、権利を、何の例外や留保もなしに認めあい、相互に支援し合う関係を構築するなかで、発達心理学に長けた者としての役割を果たす、ということ

ヴィゴツキーの「一次的障害」と「二次的障害」

先天的に盲である子どもにとって、「目が見えない」ということは自然なことであり当たり前のことである。(一次的障害)

その子が社会と関わるときに、それは「障害」となる。(二次的障害)

スピノザの「完全」「不完全」・「善悪」

- すべての個体はそれぞれに完全である。
- 存在している個体は、それぞれがそれ自体の完全性を備えている。自然の中のある個体が不完全と言われるのは、単に人間が持つ一般的観念、つまり「この個体はこうあるべきだ」という偏見と比較しているからであって、それぞれはそれぞれにただ存在しているのである。
- 「それ自体として善いもの」とか「それ自体として悪いもの」は無い。それは組み合わせによって善くも悪くもなる。
- 「初めてのスピノザ」(国分功一郎)
- (再び) **一人一人の「具体」に現れる「個別性」・「多様性」、つまり、さまざまな「兆候」・「問題」・「障害」を、人間存在の一般的な在り方の現れとして理解しようとすることです。**(資格認定申請ガイド)

アセスメントに際して

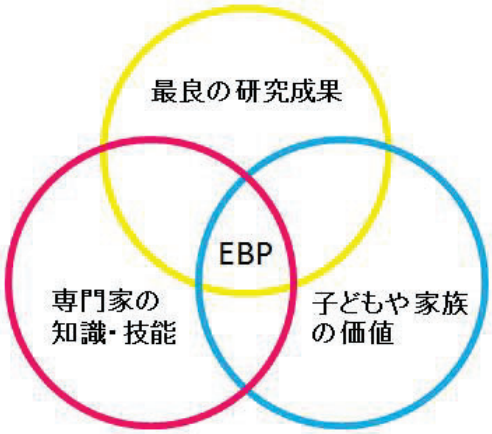
- 様々な心理検査をはじめとする「フォーマルアセスメント」は重要であるが、それはあくまでも「多数派の基準」に当てはめての「差違」を検出するものである。
- よって、それとともに、「行動観察」をはじめとした「インフォーマルアセスメント」が大変重要。
- 例えば、「エピソード記述(鯨岡峻)」の様に文章で記述するもの
- また、レッジョ・エミリアのアプローチにおける「ドキュメンテーション」の様に、文章に合わせて、画像、映像、音、作品などを使って表現するもの
- などの方法を使い
- 複雑なものを複雑なままで理解しようとするという姿勢が大切
- 「実に、光が光自身と闇を顕わすように、真理は真理自身と虚偽との規範(基準)である」スピノザ
- 「芸術品は本物を鑑賞しなさい。そうすると自ずからよくないものがわかってくる」

EBPとは？

対象者の特徴，文化，優先傾向に照らして，最良の利用可能な研究成果（＝エビデンス）を，臨床技能に統合することである（APA, 2006）

その本質は

対象者に近づくこと



具体的には

- 支援に当たっては、周囲の都合や計画ではなく、その人自身の視点に立って、その人の独自の発達を促すような支援をする。その際「情動調整」(プリザント)という視点を考慮する。
- それに際して、不都合な環境は是正する。今すぐ是正できない場合も、それについての声を上げる。
- 「現場は、一人の専門家が背負うにはあまりにも重すぎる」ので、積極的に他者、同僚や他職種の専門家などと連携する。それは「必須なもの」と理解する。これは臨床発達心理士同士が協力共働することを当然に含む。
- 様々な価値判断において、「倫理綱領」とその解説を参照する。すなわち、人類が築き上げてきた叡智に依拠する。(倫理とは「〇〇をしてはいけない」の羅列ではない。よりよい生き方、善について考え実践すること） https://jacdp.jp/wp-content/uploads/rinri.pdf
- 自己研鑽に励む。研修会の受講にとどまらず、スーパービジョン、事例検討等を主体的に実施する。

臨床発達心理士の推移

年間資格取得者数			
2004年度	632	2015年度	143
2005年度	297	2016年度	176
2006年度	289	2017年度	140
2007年度	276	2018年度	166
2008年度	319	2019年度	152
2009年度	314	2020年度	151
2010年度	300	2021年度	211
2011年度	372	2022年度	214
2012年度	420	2023年度	341
2013年度	138	2024年度	389
2014年度	206	2025年度	335

認定者総数　5981名
2025年8月19日現在の有資格者数　4652名
2025年8月19日現在の本会会員数　3990名

発達支援は求められている

「取得が簡単な資格」が悪いわけではない

- 発達支援についてのニーズはとても大きいと思われる。
- 先ほどの資格は、「誰でもとれる」(院修了レベルである必要は無い)、すぐとれる(例えば3ヶ月でとれる)、安くとれる(大学院修士課程に行くには少なく見積もっても１００数十万円以上はかかる)、と謳っている。
- 多くの人が、基礎的な発達や発達支援についての知識を持つことは、望ましいこと。
- しかし、そのカリキュラムだと、往々にして「正しいあり方」なるものに対象者を当てはめようとしてしまう。
- 院修了レベルの「臨床発達心理士」が、発達についての高い専門性を持つ専門家として、それらの方々とともに支援に当たることは、対象者とともに、支援者に対する支援にもなるし、また、不適切な支援を避けることにもつながる。

臨床発達心理士を増やすことは

- 基礎的な知識を踏まえて、より「個」に合わせた柔軟で支援的な介入をするには、「拡散的思考」により「思索」する「時間」を経験することが必要。
- 前頭前野が発達していく２０代前半の時期に、「高い学費や生活費を賄うために長時間バイトに勤しむ」ことなく、十分「拡散的思考」でもって「思索する」大学・大学院の「教育(経験)」は、大切だと思う。
- 「臨床発達心理士」を目指して様々な学習をし、ケースを担当してそのＳＶをうけ、報告書を執筆するなどの一連の経験は、それを(時期は遅れても)追経験することができるものだと言える。
- 自ら学ぶとともに、仲間である「臨床発達心理士」、そして、意識的に支援をして資格を目指す「準会員」を増やしていくことは、今、社会的にも求められていることだと考える。

お願い

- 執行部は、人々の役に立つ臨床発達心理士の会となるよう、執行部としても努力を続ける積もりです。
- そこで、
- いろいろなご意見を聞かせてください。
- 会員が、それぞれの業務を遂行するに当たって必要な条件整備を、可能な限り行っていきたいと思います。
- こんなことが必要だ、こういう仕組みがほしい、こんなことをやりたい。等々、聞かせていただき、また、積極的に動いていただきたいと思います。
- 士会全体の仕事も分担して受け持っていただきたいと思います。特に中堅や若い方に。
- 士会は、会員がその職務を遂行するに当たって「やりたいことをやる」事を支援する組織です